

吹雪

水谷啓 二

外では吹雪が荒れ狂つてゐた。裏山の雑木林の物凄いざはめきが聞えてゐた。破れた雨戸がたたくとゆれて破れ目から隙間風がひつきりなしに吹きこんで来た。彌作は處々綿のはみ出した垢じみたどてらをひつかけて顎に手をつきながらとろ／＼と燃え上るゐろり火を見つめてゐた。額に刻まれた深い皺、落ち窪んだ眼、削げた頬、眞白な髻の毛、みな深刻な生活苦と心勞のあとを示してゐた。上から自在鉤がぶら下つて煤けた鐵瓶がかけてあつた。時々焔が鐵瓶の尻をなめてゐた。ゐろりばたには彼の妻と息子が薄つぺらな布團にくるまつてころがつてゐた。右手は障子もなくすぐ土間で米俵が五六俵と農具や毀れた機織機械が雜然と重つてゐた。隅には鶏が二羽頭を羽の下に突き込んで踞つてゐた。そして時々思ひ出した様にぐる／＼鳴いてゐた。天井はなく梁の上の煤けた竹の間から煤だか藁だかわからない黒いものがあちこちから下つてゐた。家中煙が立ち籠めて隙間風が吹きこむ度に動搖した。

彼は目を上げて妻と息子を眺めた。息子は十三らしく開いた讀本の上に横顔を押し付けて涎を垂らして眠つてゐた。彼の妻は木枕よりがつくり首をおとして眠つてゐた。やつれた其の顔、ほつれた髪、毛のあちこちには白毛が見えてゐた。昔から顔にかけ涙のあとがくつきりのこつてゐた。彼は妻の顔を長いこと見つめてゐた。そしてこの頃すつかり寝れて涙脆くなつた妻を思つた彼等が結婚したのは二十五年も前のことだつた。彼は瞑目して頂垂れた。二十五年前のことがまぎ／＼と思ひ出されて來るのだつた。

彼の村は谷間の一小部落だつた。川は藍色の水を湛へて東から西へ深い峡谷を堀りながら流れてゐた。北側の山は殆ど直角近に

い傾斜をなして水に没してゐた。そして處々には絶壁が突き立つてゐた。南側は割合平滑な勾配をえがいて南に伸びてゐた。そしてあちこちに段だらけの山田が作られてゐた。部落は南側にあつた。部落の眞向ふには高い絶壁が水際に聳えてゐた。水際は永い年月の浸蝕に深く堀られて物凄く靨藍色をした水が音もなく滑り込んで行つた。頂上には小さな落葉樹が密生し、蔦かづらがずつと下まで垂れ下つてゐた。春には名も知らぬ眞白な花をつけ、秋は眞赤な色を水におとして散つて行つた。部落の人はこれを「からたきの岩」とよんでゐた。

太陽は東の谷間から昇つて行つた。東の谷間に金糸が躍る時、眞白な朝霧を透して谷間の中の緑の露が一時にきら／＼と輝いた。そしてからたきの絶壁を眞紅に染めながら西の谷間に沈んで行つた。

おみつは十八だつた。おみつはお屋敷の傭ひ女だつた。お屋敷といふのは部落一の舊家で小高い岡の上に立つてゐた。又松屋敷とも云はれてゐた。三百年も経たと云はれる松の木が四五本其の上に覆ひ被せる様に聳えてゐた。夜半高く低く谷間に響く松風は腹の底まで染み徹る様だつた。此の家は地主だつたが山畑に少しばかりの薩摩芋と蕎麥を作つてゐた。

彌作はよく彼の女が山の畑で仕事をしてゐるのを見た。遠くから見てもすぐ見分けがついた。いつも白い手拭を被つて赤い帯をしめてゐた彼がだら／＼坂の雑木林を通りぬける時白い手拭がよくくりとこちらを向いて白い顔がぱつと輝くのが見えた。うら／＼かな春の日におみつの皴がきら／＼と輝いた。

「お早うおみつちゃん」

彌作は側を通りながら聲をかけた。おみつは皴を置いて立上つた。そして返事をする代りに白い手拭をとつてにっこり微笑んだ。彌作も微笑んだ。可愛いというなじのほつれ毛が爽々しい朝風にかすかに揺れてゐた。彌作は歩きながらふり返つて見た、白い手拭が動く度にきら／＼と皴が光つてゐた。

おみつは小柄な快活なはちきれる様な青春を包んだ白い皮膚を持つた娘だつた。小さな鼻と小さな口と、大きな眼をもつた娘だつた。にっこり笑ふときの口もとはほんとに可愛らしかつたが殊に美しいのは目だつた。奥深い黒目のうるんだ何か懂れてゐる

目付きだつた。青葉の反射がちら／＼と漂ふ小さいまんないあごのあたりはすぎ透つてゐる様な感じだつた。心持目深にかぶつた白手拭の下から、あの目がつこり微笑む時彌作は世界がぱつと輝くのを見た。彼の胸に歡喜が躍るのを覺えた。彼はあの目を見なかつた日は何か物足らぬ感じがした。或夕方だつた。彌作は緞を肩にひつけて口笛を吹きながら上の山畑から下つて來た。おみつはひとりまだ仕事をしてゐた。

「精が出るなあおみつちゃん。一緒に歸らう」

彌作が聲をかけるとおみつは手を休めて、心持顔を赤らめながら手拭の下から彌作を見上げた。そして微笑んだ。おみつは手早く襪をとつて立上つた。そして彼の後について來た。二人共無言だつた。眞紅の夕陽は西の谷間に沈みかけてゐた。疎な雜木林を透しておみつの横顔に躍る眞赤な日影はうるはしかつた、やがて別れ路へ來た。

彌作は足を見つめてゐた目を上げておみつを見た。そして言つた。

「もう歸る？少し休んで行かう」

黙つておみつはついて來た。其處は小高い岡だつた。其處からは谷間全体と北に伸びる連山が見渡された、二人共足を投げ出して腰を下した。太陽は沈んでゐた。残が西空を染めて金糸でぬひ取りした様な雲が二つ三つからたきの岩の上に漂つてゐた。山々は紫の靄につままれてゐた、靄の色は次第に濃くなつて西の空にはもはや一抹の橙色の夕残を止めてゐるばかりで輝いた雲もいつしか消えてゐた。黄昏の闇が二人を取巻いて來た。山寺の鐘が鳴りはじめた。

「ごーん」

脈々たる餘韻は谷間の闇を震はしてはるか山々の彼方の闇に吸ひ込まれて行つた。鐘の音の一響き毎にあたりは闇さを増して行つた。鐘の音は闇の中を匍ふて消えて行つた。川の面に立昇る霧は次第に谷間を埋めて行つた。木々も家々も……からたきの岩は闇の彼方に幻の様に浮んで見えた。

二人は尙じつとしてゐたおみつの白いうなじは闇の中に惱ましく浮き出して見えた。彌作は胸に高鳴る動悸を感じた。そしてお

みつの胸に高鳴るものも彼には感じられた。彌作は幸福感にうつとりとしてゐた。急に彼は立ち上つた。おみつは撥かれた様に立ち上つた。彼はおみつの顔をのぞき込みながそつとさゝやいた。

「おみつちゃん！」

彼の聲はふるへてゐた。おみつはそれを感じた。おみつはそれを感じた。そして黙つて彼の顔をみつめた。彼はおみつがふるへるのが見えた。其の大きな深い目はまじろぎもせず彼の目をみつめた。彼はどきまぎして目を伏せた。おみつは赤くなつてうなだれたが、其の色は闇の爲に見えなかつた。

「おみつちゃん！」

彼はも一度そつとさゝやいた。

「さよなら！」

おみつはかすかな聲でさゝやいた。そして次の瞬間おみつは山の傾斜を元氣よく駈けてゐた。

「さよなら、又明日ね！」

彌作はうしろから叫んだがおみつはふりむかなかつた。そしてやがて闇の中に吸ひ込まれてしまつた。彌作は鳶を肩にひっかけ、山を下りはじめた。もうすつかり暗かつた。空には星が二つ三つ乙女の涙の様なうるんだ光を帯びてまたたいてゐた。晩秋だつた。夜風は冷々として冷たかつた。

× × × × × × × ×

夜半彌作は家を出た。冷や冷やした夜氣が垢じみたとてらの襟のすきまから首すぢに染みこんだ。

「おーやむ。」

ひとり言を言つて彌作は龜の子の様に頸をひっこめた。突然

「おあつくしやー！」

吹 雪

と途方もない大きな唾を一つして歩き出した。染みとほる様に冷い霜夜だった。傾いた寒月が凍りつく様に冷い光を投げてゐた。そして凍つた水たまりにちら／＼と動いてゐた。萬物が眞白な霜とそれを照す銀色の月光につままれて死んだ様に横つてゐた。歩けばさく／＼と霜柱が碎けた。彼は立止つて小便をした。そして急にがたがたとふるへた。あとが霜がとけて黒くなつてゐるのが見えた。そして又歩き出した。彼は目を上げた。からたきの岩が月光をうけて物凄く突き立つてゐた。其の下に吸ひ込まれて行く眞黒な月影を見た時彼はぞつとして髪の毛をきりかきとられた。彼は目をうつして松屋敷の方を見た。眞黒な老松は魔物の様に聳え立つてゐた。お屋敷の墓は月光にきらきらと輝いてゐた。

彼は歩きながら自分が今しやうとしてゐること考へて見た。彼は自分のしやうとする事が決して善い事とは思はなかつた。彼はたまらなくおみつが可愛さうになつた。しかし或抗し難い大きな力がお屋敷の方へひつ張つて行くのだつた。ざわざわと音を立てる松風を聞きながら暗い下關を通つて行つた。霜にかたくなつた落葉をふむ音が氣味悪く彼の耳にこびりついた。

× × × × ×

冬は去つた。そして春が来た。からたきの岩の上からは眞白な花が零れて水に浮んだ。裏の雑木は林はしたゝる新緑に彼はれた小鳥が其の間を飛び廻つて囀つた。あらゆる物が生きる力の力強さを示してゐた。

彌作はおみつが妊娠した事を知つた。お屋敷の旦那は彌作の親爺萬平を呼び出した。彼は母はずつと以前に失つてゐた。萬平は息子に早く嫁を取りたいと思つてゐたので話は都合よく進んで五月にささやかな結婚式を挙げた。彼等は幸福だつたおみつはよく働いた。萬平はよく嫁自慢をして歩いた。そして孫の生れるのを楽しみして待ち焦れてゐた。しかし孫の生れぬ前に急にぼつと死んでしまつた。

秋が来てとり入れ時も迫つた頃だつた。萬平は過度の労働の爲か、山田で急に腦溢血で倒れた。息子と嫁が駆け付けた時はもう全く体の自由はきかなかつた。ものも云へなかつた。二人を見た時老ひた眼から硬ばつた顔に涙が溢れ出た。二人は抱き付いて泣いた。村人の助けで家に運び入れた時は全く粹切れてゐた。

今にも泣き出しさうな空模様だつた十人足らずで淋しい葬列が雜木林を縫つて裏山に登つて行つた。彌作は粗末な棺の側にうなだれながら父親を思つた。彼は母と死別してから十数年の間父に養はれて來たのである。萬平は殆ど彼を叱らなかつた、大分我がまゝを云つて困らせた事もあつた。萬平はよくゐろりばたで繩なひながら四十七士の物語をして聞かせたものだつた。彼はいつも萬平から離れなかつた。畠へもついて行つて二人で麥島の土くれ均しをした事もあつた。彼は又新しい涙の滲んで來るのを覺えた。

其の後五日して子が生れた、女だつた、丸丸と太つてゐた、名前は菊枝とつけた。やがて吹雪の狂ふ冬が來た、

× × × × ×

又春が來た、親爺を失つた彌作の悲しみも遠く淡く消えて行つた。菊枝はまる／＼と太つて行つた。親子三人はよく共に山の畑に出掛けるのだつた。おみつは片方に菊枝と晝飯を片方に農具や肥料を入れて出掛けるのであつた。

朝まだきに彼等は家を出た、春とは云へ吹下す曉風は冷々として寒かつた。藁屋根には白く霜がおいでゐた。山路を登るとさく／＼霜柱が碎けた。菊枝は着物に埋まつておとなしく母の顔を眺めてゐた。白い小犬がやたらに彼等の足下をじやれつき廻つてゐた。そして、先廻りして雜木林の下蔭の赤い藪かうじの中からひよつこりとび出した。山の段だら畑にもまつ白く霜が下りてゐた。彌作は枯木を集めて火をつけた、爽々しい山の朝の空氣に一條の白い煙が立昇り始めた。おみつは菊枝を下して「乳房をあてがつた。彌作は乳房に顔を押し付けて、片方の乳房をつかみながら無心に吸つてゐる子を眺めて笑つてゐた。俯向いたおみつ

の髪のはつれ毛が朝風にゆれた。

東の谷間からぼつと一すじの光線が躍つた。と山々や谷間の霜が一時にきらきらと輝いた。谷間から立ち昇る眞白い霧は日光に照り映えながら次第に薄れて行つた。うね／＼と重疊する連山の殘雪がざら／＼と眩しい程朝日を反射してゐた。赤子は母親の胸板に鼻をおし付けたまゝすやくと眠つた。母親はそつと赤子の口を乳房から外して穿んだ處に蕙を敷いて寢かして、自分の袖無しをかけてやつた。父も一枚脱いでかけながら、そつと寢顔をのぞきこんだ。そして微笑んだ。やがて眞正面に日を受

けた段だら畑に二つの畝が並んできらりきらり光り始めた。

日は高く昇つた。赤子の泣聲に二人は急に手を止めた。彌作は目を仰いだ、そして額の汗を袖口で拭きながら言った。

「晝めしやらかそかい、おみつ」

「あゝ」

おみつは答へて泥手をはらつて菊枝を抱き上げて乳房をふくませた。彌作は飯櫃を取り出した。其の拍子に薩摩芋がころ／＼と轉げ出して手を伸ばす時もなく段だら畑をびん／＼とび越しながら轉げて行つた。そしてはるか下の方ではつと碎け散つた。菊枝は乳房を放してきやつきやつと笑つた。日はうら／＼かに照つてゐた。遠山は紫に霞んでゐた。山々から、谷間から、川の面からきらきら陽炎が立ち昇つた。雑木林のあたりで鶯が鳴いた。春が來たのだ。

夕方彼等は長い影を段だら畑に落しつゝ歸つて行つた。

× × × × ×

それから二十年近くの年月が去つた。彌作とおみつはよく働いた。子供が三人生れたが、中の子は生れてすぐ死んだ。残りは二人共男で總領は十七才で村でも立派な若者になつた。末の子は谷間の分教場の尋常二年だつた。菊枝は十七でおみつの若い時に似た小柄の愛嬌のある娘になつてゐた。

親子三人は毎日野良に出て働いた。晨に霜を踏んで畑に出て終日木枯の荒ぶ野良の麥蒔をして黄昏の闇に山寺の鐘の音を聞きながら歸つて來るのだつた。彌作は凍りついた足を草鞋ぐるみゐろり火にさしくべて兩手を翳した。手足がほんのりと暖る時彼の心も暖く溶けて行くのだつた。上から釣り下る煤けた自在鉤にかけた大鍋には沸々と湯氣が立昇り四邊にたまらぬ様な食欲をそゝる匂ひを漂してゐた。あろりばたに居並ぶ顔は健康と幸福に輝いてゐた。彌作はこの時云ひしれぬ幸福と、安堵とを覺えた。靄々たる和氣は立ちこむるゐろり火の煙と共に煤たけ屋根の下に満ち満ちてゐた。外には吹雲の荒れ狂ふ日もこの屋根の下には春の暖かさがあつた。

しかしこの家の中にも冬が来たそして吹雪が荒び初めた。

あくる年も秋になつてとり入れ時がそろ／＼近づいた頃だつた。或夜彌作は今年の不作の事を思ひながらゐろり火を眺めてゐた時ごと／＼と戸をうごかす音がした。

「誰け？」

おみつが立つて戸を開けた。ほの暗いランプの光に浮び出た青白い寝れた顔は菊枝だつた。

「まあ！菊枝け！何して戻つて来たけ？」

彌作の頭を或不吉な豫感が掠めた。瞬間菊枝は戸にしがみ付いてわつと泣き出した。

「何したけ、菊枝？何したけ？」

おみつはおろ／＼聲を立てながら菊枝を引き入れやうとしたがどうしても入らうとしなかつた。やつと引き入れた菊枝はよろよろとよろめき込んだ。ランプの火影から押し隠すやうにした。其の腹は外眼にも分かる程大きかつた。おみつは急にわつと土間にくずれて泣き出した。彌作は悲しみと憤怒が錯雑して頭の中を駆け廻るのを感じた。彼は薪の割木を掴んで跳び下りた。おみつが起上つて彌作の腕にしがみついた彌作はおみつを振り離さうともがきながら叫んだ。

「ええはなせ！はなさんか！うぬ、うなあ、えたいの知れん男ん子を孕みやがつて親ん面に泥塗つたな！おきく、はなさんか！」
着物がびり／＼と裂けて彌作の震へる腕が露出した。おみつは又しがみついた。彌作は足を上げて菊枝を蹴倒した。

「き、菊枝わりやわりや……」

彌作の唇がぶる／＼震へた。同時に、にらみつけた両眼から涙が泉のやうに湧き出た。

「お、親不孝者！」

吹雪

おみつは男の名を聞かれても唯泣くばかりだった。おみつは毎日泣いた。すつかり瘦せ衰へてしまった。髪をふり亂して目を据えて

「恨み殺してくれるー」

と云ふかと思ふと急に泣き出す様になつて來た。彌作の心は暗愴たる闇に閉された。

或夕方彌作は鉛の様な重い心を抱いて山田から歸つて來た。力なく戸を開けて中をのぞき込んだ瞬間彌作は電氣に打たれた様に立ちすくんだ。

彼は土間の機の根本にしがみ付きながら、足の先まで硬直して倒れてゐる菊枝を見た。振り亂した髪の下に見える土色の顔はおそろしく引きつつてゐた。血走つた目は戸口を見つめたまゝ据つてゐたが彌作は見えぬらしかつた。食ひしばつた齒の隙間から恐しいうめきをもらしてゐた。

彌作は驚きと恐怖と混亂が彼の頭へ逆流するのを覺えた。彼はすべてを一瞬に知覺した。月足らずで生れるのだ！彼は戸外に飛び出した。

「おみつーおみつー誰か來てくれ！」

おみつはゐなかつた。誰も來なかつた。其の時彼は絞り出す様な恐しいうめきを聞いた。

「誰か來てくれ誰も居らんか！」

彼は再び土間に飛び込んだ。菊枝は全身からあらゆる力が抜け出した様に土間にくずれてゐた。其の側にひく／＼うごく肉塊があつた。其の肉塊の顔の上に切れを押し付けてゐる菊枝の手を見た時。雷に打たれた様に彼の頭にひらいたものがあつた。殺さうとしてゐるんだ！

彌作は我を忘れた。

「わりや氣でも狂うたか！」

彼はとび込んで着物の下から無気味な肉塊をとり上げた瞬間菊枝の顔が恐しく痙攣して二つの手が彌作の手に^{おろ}り付いて來た。彌作は其の恐しく血走つた目にたじくと後退りした。菊枝は最後の力を振つて膝の上に起き上らうとしたが駄目だつた。

「子を返せ。」

腹から絞り出す様な聲を出すと、ばたりと土間にのめつた。彌作は泣き出したい程混亂した。彼は肉塊を握つたまゝおろくとしてゐた。

「誰か来てくれろ！おみつ！おみつは居らんか！」

おみつが來た、急に眞青になつて立竦んで倒れさうになつた。彌作はおみつの手を強く引いた。よろ／＼と倒れかゝつたおみつに肉塊を着物ぐるみ押し付けて、彼は菊枝を疊に抱え上げた。

「子とり婆あをつれて來る、後はたのむぞ！」

彼は彈丸の様に闇の中に飛び出した。

x x x x x

うす闇いランプの火影に彌作は死人の様に青ざめて瘦せ果てた菊枝を見つめてゐた。側ではおみつが疊に俯して泣いてゐた。彌作は菊枝の眉と唇がひく／＼と引きつるのを見た。彼は恐しい豫感にとらはれた、突然菊枝が目をあけてきよろ／＼と見廻した血走つてはゐなかつたが狂暴な光りを帯びてゐた。

「ひひひひひ……」

突然菊枝が笑つた彌作はぐわんと一つ頭をなぐられた様な氣がした。急に止める間もなく菊枝は布團の上に起き上つた。血走つた目がぎら／＼と光つた

「子を返せ！子を返せ！」

叫んだかと思ふと倒れて泣き出した。おみつはわつと泣き出した。氣が狂つたのだ！

吹 雪

子は隣の女房にあづけられた。そしてお重といふ名前が着けられた。月足らずの子で瘦せて弱々しく泣いてゐた。菊枝は毎日子をかへせと泣き喚き狂ひ廻つたり急な笑つたりしてゐた。彌作は恐れて決して子の顔を見せなかつた。二十日ばかり経つて子は死んでしまつた。菊枝にはかくしてゐたがいつの間にか菊枝も知つた。死んだお重の枕元に飛び込んで来てお重を烈しくかき抱いて大聲を上げて泣き出した。目と鼻から涙が溢れ出た。

「お重！お重！お重は死んだ！」

彌作は見るにしのびなかつた。しかし彼はお重の亡骸を山に埋めねばならなかつた。菊枝はどうしても放さうとしなかつた。無理に引放した時菊枝は又氣絶してしまつた。

其の夕方小さな瓶を抱いて山路を登つてゐる彌作の姿が見受けられた。寒い日だつた。

冬が来た二度目の氣絶から正氣にかへつた菊枝は全くの狂女だつた。彼女は晝の間は村中をうろつき廻つた。子供に石を投げられたり犬をけしかけられたりしてあちこちに逃げ惑つてゐた。髪はふり亂し露な胸には肋骨が突き出てゐた。彌作は柱に縛りつけておいて見たが一日中泣き喚かれては堪え切れなかつた。夜になると菊枝の泣き叫ぶ聲が谷間に響き渡つた。

「お重！お重やーい、お重は死んだあー」

肺腑をしぼる様な其の聲は木枯に雜つて悲痛に夜半の谷間にこだまするのだつた。

彌作は堪へ切れなかつた。彼はこの聲を聞く時胸を掻きまられる様な氣がした。彼は毎晩川端の酒屋から泥酔して歸つて來た。そして殺すと云つて荒れ狂つた。おみつは泣いた。貧困は甚しくなつた。戸は破れ木枯が吹き込んで來た。

總領の太作は段々家に來なくなつた。外の家に泊る日が多くなつた。彼は勝れた頭腦と逞しい筋骨を持つてゐた。彼は夢想家だつた。彼は一人も友達を持たなかつた。昔馴染は大阪に行つてゐるとの事だつた。そして彼によく手紙が來た。彼は轟々たる機

械の騒音の中に目まぐるしく動く友を想像した。彌作も二三度彼が納屋の藁の上にねころんで友の手紙を讀んでゐるのを見た。彼は何か或不安を感じてゐた。

太作は三日續けて歸らなかつた彌作は不安な豫感に襲はれた。夕方に歸つた時彼は垢じみた疊の上に落ちてゐる白き葉書が目についた。手にとり上げた彼の目が其の上を走つた。彼の手がぶる／＼と震へた顔が急に土色になつた葉書を引き裂いて土間にたゞきつけた

「不孝者」

どたりと自分の体を疊の上に投げ出した。

其の日の夜だつたおみつは泣いてゐた。太作は家出してしまつたのである。末の子の太助も母にしがみついて泣いてゐた。

どざりと戸に打當つて倒れる音がした。續いて嗚咽がもれて來た。おみつは泣き欲りながら立つて來て戸を開けた。泥酔した彌作が凍り付いた土の上に倒れてゐた、急に彌作が顔を上げた。

「うぬ、見るな！見るなと言ふが」

おみつはすゝり泣きながら顔をひっこめると

「うぬ逃げるか。殺すぞ」

がたんと戸を蹴倒して彌作はよろ／＼と躓き込んだ。

「うぬ等は俺を責め殺すつもりだな。殺せ。殺して見る。」

突然彼は壁にかけてある大鎌をとつておみつに狂ひかゝつた。おみつは悲鳴を上げて戸口の方に逃げ出した。

「うぬ逃げるか。」

と追ひすがらうとした時

「ととさん」

吹 雪

と叫んで太助が彌作の足にからみついて泣き出した。彌作は急に立止まつて太助を見た彼は握つた大鎌をばたりと取りおとした

「責め殺せー責め殺して見る俺あ俺あ………」

叫ぶとがくりと土間にくつれた。そして烈しくすゝりなき出した

「た太作わりや親不孝者だぞー」

握りしめたこぶしの内から涙と嗚咽がほとばしり出した。暗いランプの火影に彼の肩が烈しく揺れるのが見えた。戸の倒れた戸口から凍りつく様な夜風がふきこんできた

× × × × × × ×

彌作はすつかり力がぬけ出してしまつた様に思はれた。あの太作の輝しい顔も父を助けるたくましい腕も見られないのだと思ふと鼻の奥に涙がにじんで来るのだつた。菊枝のことを思ふとき彼の心は墨の様に暗かつた。村の子供に犬の様に追ひまはされる我が子を見るとき、悲しさと恥かしさがこみ上げて来るのだつた。彼は正視するにしのびなかつた。涙をこらへて彼は思ふのだつた。「死んでくれろそれがお前の爲にもどんなに幸福だか知れないのだ！」

× × × × × × ×

恐しい吹雪の夜半だつた、木々はビュービュー鳴つてゐた。谷間全体にごう／＼と恐しい吹雪の音が響いた。戸のすきまからちら／＼雪が舞ひ込んで来た。ぎーぎー柱がきしんで家は揺れてゐた。いつも歸つて来る頃になつても菊枝は歸つて来なかつた。そして「お重！お重お重！」と叫ぶ聲も今日は聞えなかつた。不安が彌作とおみつの心を打つた。おみつはよろ／＼して提灯に火をつけた。戸を開けるとざあつとすさまじい吹雪が二人の横顔に雪を叩きつけた、寒さが全身にしみ通つた。やがて二つの黒い影は前にのめる様に傾きながら降りしきる雪の中に消えて行つた。彼等は狭い部落を一通りたづねたが何處にも居なかつた。おみつは寒さに震へながら泣いてゐた。悲しい或物が彌作の頭をかすめた。彼は愕然としておみつを振りかへつて云つた。

「しまつた！おみつ墓場だ！」

彌作は吹雪の中を消えた提灯をつかんだまゝ走り出した。續いておみつが走り出した。物凄く鳴りさはぐ雜木林を突きぬけて眞闇な道を彌作は馳け登つて行つた。横なぎに吹きつける吹雪に彌作の体は吹き飛ばされさうだつた。何遍も轉んでは起き上り馳け續けた。墓場に來た。恐しく眞闇だつた。何も見えなかつた。彼は手探りで何遍も倒れながらお重の小さい墓石を探りあてた。その小さい墓石を抱いてゐる氷の様に冷い或物に觸つた時恐しい戦慄が彼を襲つた。

「しまつたーやつぱりさうだつたか、遅かつたー」

彼は抱く様にしてやつと提灯に火をつけた。はつと照し出された烈しく舞ひ狂ふ粉雪をとほして墓を抱いたまゝ凍死した痛ましい死骸の青白い顔が浮び出た。彌作の心の悲しみが一時に溢れ出た。菊枝許してくれる俺が悪かつた俺を恨んでくれ！凍えた顔に冷い涙が止めどもなく流れた。後れて馳けつたおみつは菊枝の死体を見てよろ／＼とよろけた。そして地に倒れて泣き出した。彌作は菊枝の死体を背負つて山を降つて行つた。村の人人は吹雪にまじるおみつの身を切る様な泣聲を聞いたであらう。

× × × × ×

外は吹雪は止んでゐた。しきりに雪が降りしきつてゐるのであらう。しみ透る様な静けさだ。ゐろり火は燃えつくして消えかゝつてゐた。ことりと戸がして鼠がちゆつと鳴いて土間を通つた。鶏がく／＼と鳴いた。

彌作ははつとして長い回顧から現實にかへつて顔を上げた。顔は涙にぬれてゐた。菊枝が死んでからもう四年になる。又春は來たけれ共何といふ陰慘な淋しい春だつたらう。其處には吹雪の残した慘骸だけしか残つてゐなかつた。彼は思つた。しかしやつぱり吹雪は止んで春が來たのだ。陰慘な冬は過ぎたのだ。淋しくても矢張春だ。彼は無心に眠つてゐる太助の顔を見た。その悲しい顔にはかすかに慈愛の笑みが浮んだ。赤い頬、丈夫さうな體、この子も今年の三月は卒業する又春が來るのだ。あの山の段だら畑にうら／＼かな春の輝を受けて三つのの鍬光るのももう近い。

「あーっあ」

彌作は大きなあくびをした。涙の干からびた顔が奇妙に引きつた。時計が二時を打つた。(終り) 昭和四年一月十二日